

# 第11章

## 児童・生徒と保護者の様子

- 第1節 児童・生徒の変化
- 第2節 保護者の様子  
(第1節 直井 多美子、第2節 邵 勤風)

序章

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章

第8章

第9章

第10章

第11章

資料編

## 第1節

## 児童・生徒の変化

## ◇児童の変化

児童の変化では、「授業中に立ち歩いたり教室外に出たりする児童」が増加したという認識が強まり、「リーダーシップのとれる児童」「やる気や自信を持っている児童」は減少したという認識が強くなっている。一方、「児童間の学力格差」は拡大したと感ずる比率が高まった。 【Q14(教員)】

小学校教員に数年前と比べて、児童がどう変わってきているのかをたずねた(図11-1-1)。ここでは、経年での変化が大きかった項目を中心に取り上げる。

## 1) 授業中に立ち歩く児童の増加

「授業中に立ち歩いたり教室外に出たりする児童」が「増えた」と回答した割合は、02年調査で37.4%から07年調査で48.4%と10ポイント以上増加した。

図表は省略するが、学年別にみると07年調査で「増えた」の割合は、小1生54.8%、小2生54.1%、小3生56.3%、小4生52.1%、小5生37.7%、小6生38.4%であった。とくに小1～小4生において5割と高いことに注目したい。いわゆる「小1プロブレム」と呼ばれる現象が小2生以上にも見受けられることを示唆している。

## 2) リーダーシップ、やる気のある児童の減少

「リーダーシップのとれる児童」「やる気や自信を持っている児童」の2項目で、「減った」と回答した割合が02年調査に比べて5ポイント以上増加し、98年調査の数値に近づいている。「リ

ーダーシップのとれる児童」では、「減った」という回答が98年調査の77.0%から02年調査では64.9%と減少したが、その後増加に転じて07年調査では72.9%となった。一方「やる気や自信を持っている児童」では、98年調査の40.8%から02年調査で29.2%に減った後、07年調査で35.0%となっている。

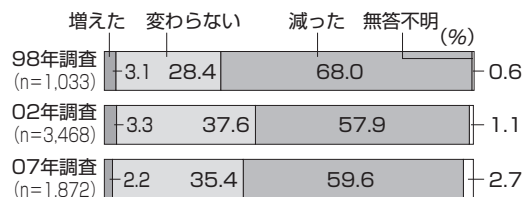
## 3) 児童における学力格差の進行

「児童集団の学力水準」では、「低くなった」と回答した割合が、少し増加したものの(02年調査36.6%→07年調査40.4%)、総じて大きな変化はみられない。しかし、「児童間の学力格差」では、「大きくなった」と回答した割合が02年調査(50.9%)から10ポイント以上増加して07年調査では64.5%となった。これは98年調査の62.3%をも上回る数値である。

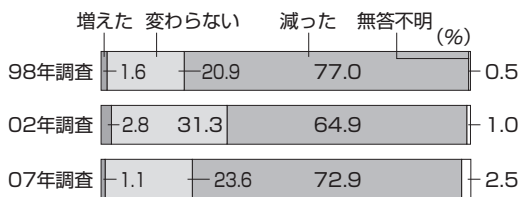
こうした学力格差に対する認識の変化は、学力水準に対するその変化が小さいことを考えると、児童間での学力のちらばりが大きくなった可能性があるといえよう。すなわち、勉強ができる子とできない子の学力差が広がりつつある、と小学校教員の目には映っているようだ。

図11-1-1 児童の変化（小学校教員／経年比較）

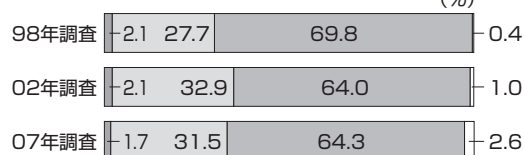
協調性のある児童



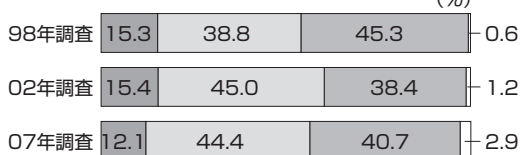
リーダーシップのとれる児童



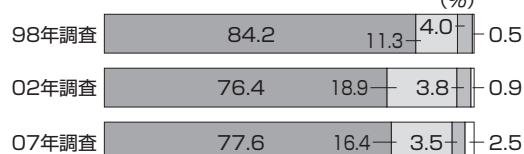
落ち着いた児童



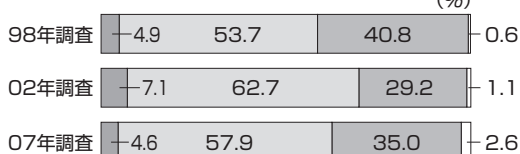
自己表現力の高い児童



自己中心的な児童



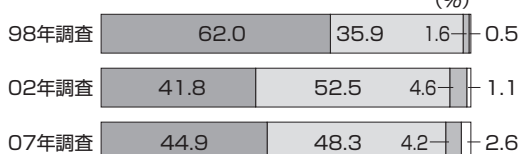
やる気や自信を持っている児童



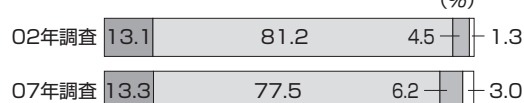
粘り強い思考力のある児童



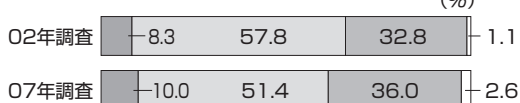
学校や教師に対して冷めたところのある児童



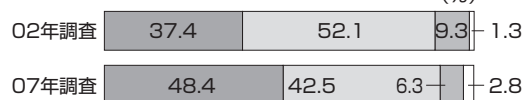
授業に物足りなさを感じる児童



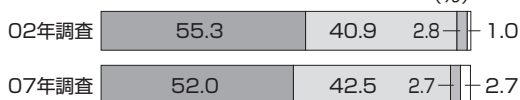
家庭学習の習慣が身についている児童



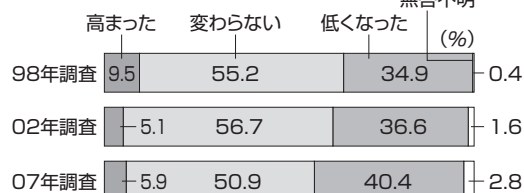
授業中に立ち歩いたり教室外に出たりする児童



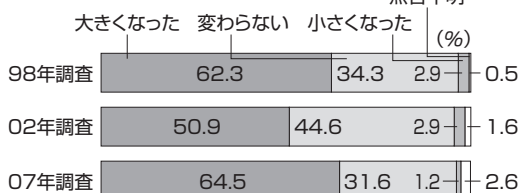
受け身的な児童



児童集団の学力水準



児童間の学力格差



注) 「授業に物足りなさを感じる児童」「家庭学習の習慣が身についている児童」「授業中に立ち歩いたり教室外に出たりする児童」「受け身的な児童」は、98年調査ではたずねていない。

## ◇生徒の変化

生徒の変化では、「やる気や自信を持っている生徒」で「減った」の比率が高まっている。他方で「生徒集団の学力水準」はあまり変化していないものの、約7割の教員が「生徒間の学力格差」の拡大を認識している。 【Q14(教員)】

中学校教員に対して、数年前と比べて、生徒がどう変わってきているのかをたずねた(図11-1-2)。ここでは、経年の変化が大きかった項目を中心に取り上げる。

## 1) やる気のある生徒の減少

「やる気や自信を持っている生徒」では、「減った」の回答が増加している。02年調査の36.1%から07年調査では43.0%へと5ポイント以上増えている。一方で、「リーダーシップのとれる生徒」では小学校教員のような大きな変化はみられない。

## 2) 生徒間の学力格差が進行し、とりわけ数学で拡大の認識が増加

「生徒間の学力格差」の項目では、「大きくなった」と回答した割合は、02年調査の58.8%から07年調査では68.7%と、10ポイント程度増加し、約7割の教員が学力格差の拡大を認識している。一方、「生徒集団の学力水準」では、02年調査、07年調査ともにほとんど変化はみられず、「低くなった」の回答がいずれも5割強と多い。

学力水準への認識があまり変わらないのに対

して、生徒の間で学力格差が拡大したという認識が広がっており、こうした傾向は小学校教員と共通している。

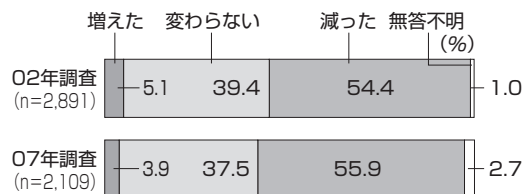
次に、図表は省略するが担当教科別に学力格差の変化をみていく。「生徒間の学力格差」が「大きくなった」と答えた比率の伸び方(02年調査→07年調査)を担当教科別に示し、伸び方の大きかったものから順に並べると次のとおりになる。数学(58.7%→72.8%)、社会(56.6%→69.1%)、理科(55.7%→67.3%)の3教科において10ポイント以上増加している。なかでも数学は5年間で14.1ポイントの大幅増となった。一方、国語(58.3%→66.7%)、外国語(62.9%→66.7%)の増加は他の3教科に比べて小さい伸びにとどまった。

この教科別の伸び方の差からわかるのは、外国語の教員は以前から学力の差を認識していたのに対して、数学では近年になって意識しはじめた教員が増えたことである。

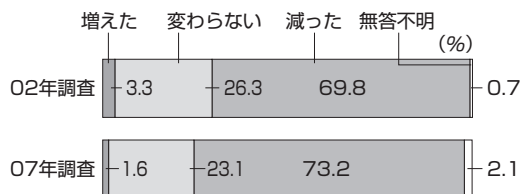
世間の子どもたちの学力格差への不安は、教員の認識にも表れており、そうした認識をもつ教員が増えていることが確認できた。

図11-1-2 生徒の変化（中学校教員／経年比較）

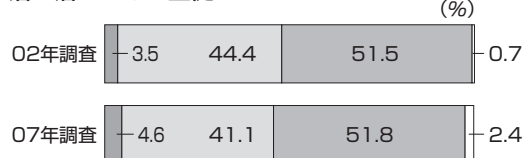
協調性のある生徒



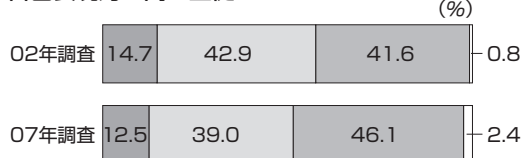
リーダーシップのとれる生徒



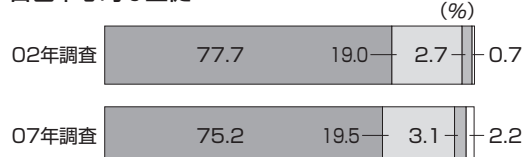
落ち着いたある生徒



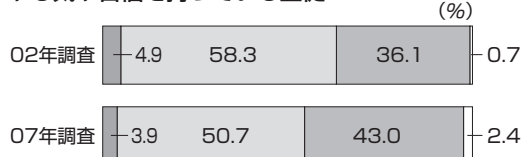
自己表現力の高い生徒



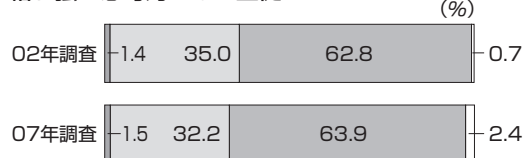
自己中心的な生徒



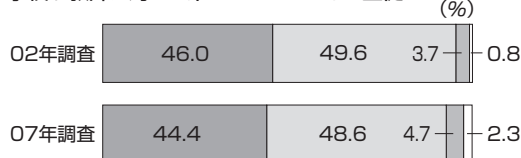
やる気や自信を持っている生徒



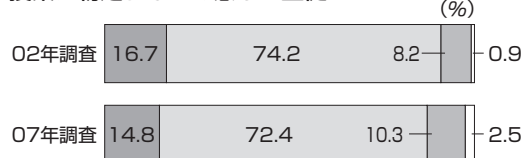
粘り強い思考力のある生徒



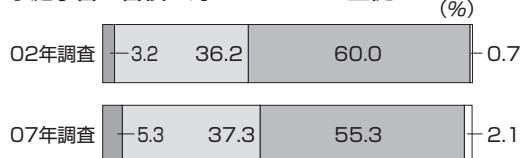
学校や教師に対して冷めたところのある生徒



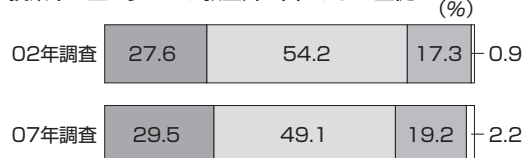
授業に物足りなさを感じる生徒



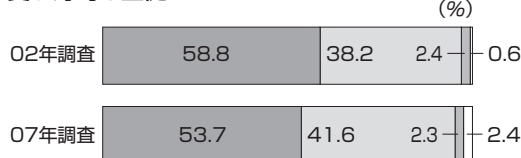
家庭学習の習慣が身についている生徒



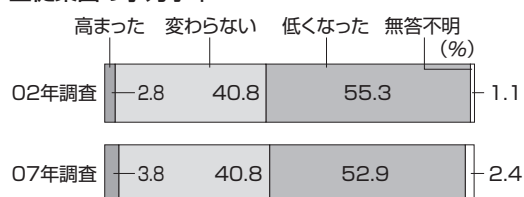
授業中に立ち歩いたり教室外に出たりする生徒



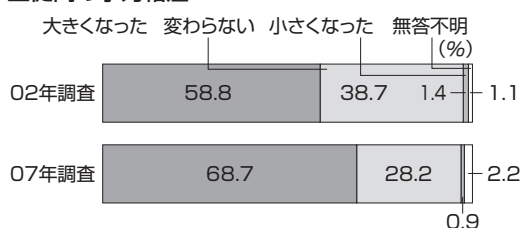
受け身的な生徒



生徒集団の学力水準



生徒間の学力格差



## 第2節

## 保護者の様子

数年前と比べて、最近「学校にクレームを言う保護者」が「増えた」と回答している小・中学校の教員が8割弱いる。また「学校に協力的な保護者」は、「変わらない」と回答している小・中学校の教員が5～6割いる一方、「減った」も3割を占めている。担任をしている学級の保護者の様子では、「授業参観への出席率が高い」が小学校では8割弱だが、中学校になると、5割弱である。一方、「PTAの役員を決めるのが難しい」が小学校の5割弱から、中学校では6割になる。

【Q15-A、B(教員)】

### 1) 小・中学校とも約8割の教員が「学校にクレームを言う保護者」が「増えた」と回答

近年、モンスターペアレントが増えているとよくいわれるが、実際、小・中学校の教員はどのように感じているのだろうか。数年前と比べた最近の保護者の様子の変化について、5項目をたずねた。図11-2-1は小学校教員の結果をまとめたグラフである。「学校にクレームを言う保護者」「自分の子どものことしか考えない保護者」「子どもに無関心な保護者」の3項目は「増えた」と回答した小学校教員が6～8割弱に達している。一方「教師の指導を信頼している保護者」「学校に協力的な保護者」の2項目は「変わらない」との回答が5割前後ではあるが、「減った」と回答した小学校教員も3～4割いる。

さらに、「学校に協力的な保護者」と「学校にクレームを言う保護者」の2項目を取り上げ、教職経験年数別にみたものが図11-2-2と図11-2-3である。「学校に協力的な保護者」では、「減った」との回答割合は「5年目以下」が3割弱に対して、「31年目以上」になると、5割に増加している(図11-2-2)。教職経験年数が長い小学校教員ほど学校に協力的な保護者が少なくなっ

ていると感じているようである。図11-2-3に示した「学校にクレームを言う保護者」では、教職経験年数が長くなるにつれ、「増えた」と回答した小学校教員の割合が増加している(「5年目以下」68.7%、「31年目以上」84.3%)。

中学校教員についてみてみよう。図11-2-4は保護者の様子の変化に関する中学校教員の全体値を示している。図11-2-5と図11-2-6は小学校教員と同様に、5項目のうち、「学校に協力的な保護者」と「学校にクレームを言う保護者」を取り上げ結果をまとめたグラフである。これをみるとわかるように、傾向は小学校教員とほぼ同様であった。

ところで、これらの項目では「増えた」「変わらない」「減った」という3つの選択肢を設定してたずねている。しかし、この設問は教員の認識をたずねたものであり、「学校にクレームを言う保護者」が「増えた」と答えている小・中学校の教員が8割弱であるとしても、そのことは「学校にクレームを言う保護者」が8割弱いるということは意味していない。この点には留意が必要である。この質問項目と関連して、保護者への対応に教員がどれくらい悩んでいるのかに

図11-2-1 保護者の様子の変化（小学校教員）（n=1,872）

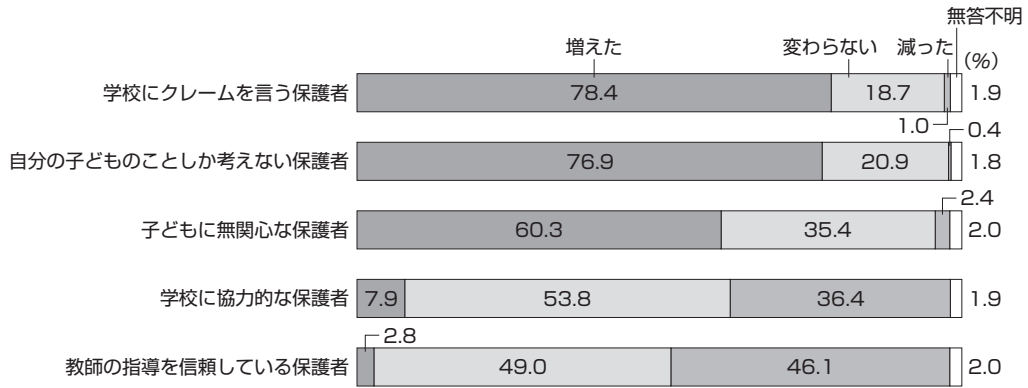


図11-2-2 学校に協力的な保護者（小学校教員／教職経験年数別）

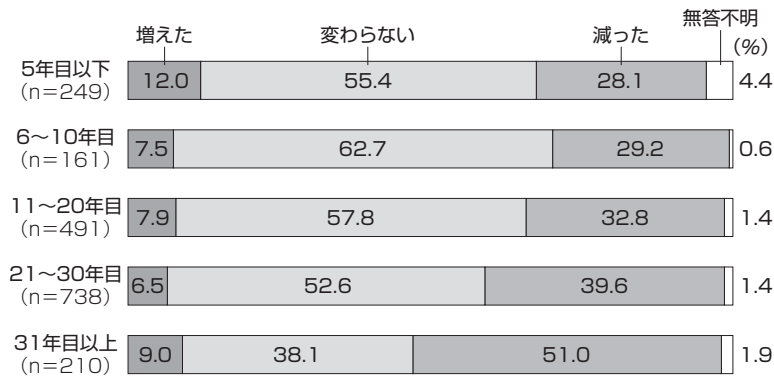
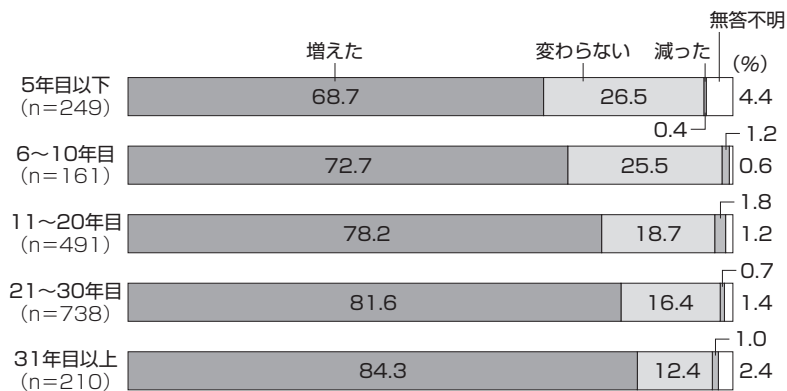


図11-2-3 学校にクレームを言う保護者（小学校教員／教職経験年数別）



については、9章2節「教員の悩み」の図9-2-1 (p.127) にみたように「保護者や地域住民への対応が負担である」は、小・中学校の教員の悩みでは上位に入っていない。しかし、多くの小・中学校の教員がモンスターペアレンツが増えていると感じているのは確かである。

## 2) 担任している学級の保護者は学校に協力的と認識している

担任をしている学級の保護者の様子についても5項目をたずねた。小・中学校の教員についての結果をあわせてみていきたい(図11-2-7)。「授業参観への出席率が高い」は、小学校では8割弱に対して、中学校では5割弱にとどまって

いる(「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%、以下同)。「教育熱心な保護者が多い」との回答割合は小学校と中学校で、ほとんど同じである。「保護者同士のつながりが強い」は、小学校では5割だが、中学校では4割である。一方「PTAの役員を決めるのが難しい」は、小学校教員(47.7%)より中学校教員(63.9%)のほうが回答した比率が高い。「保護者が講師やアシスタントとして授業にかかわっている」は他の項目と比べて、小・中学校とも回答比率がとても低い。小学校教員では19.5%だが、中学校教員はわずか5.0%である。小・中学校の教員とも担任をしている学級の保護者は教育熱心で学校に協力的であると感じているといえる。

図11-2-4 保護者の様子の変化(中学校教員) (n=2,109)

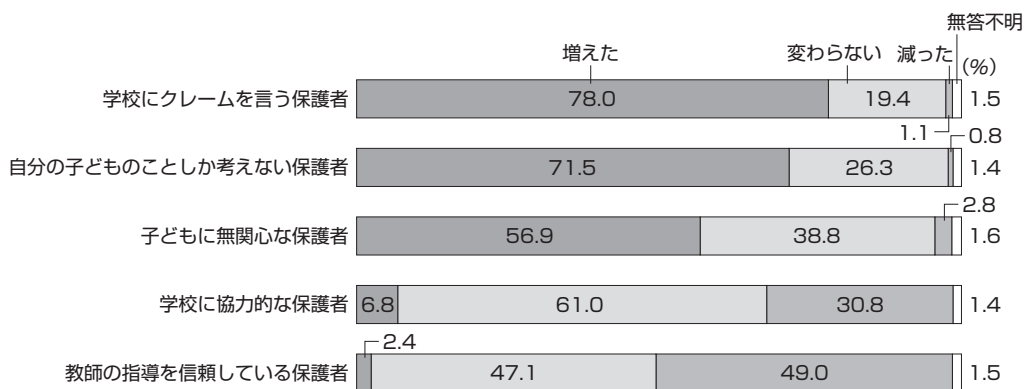
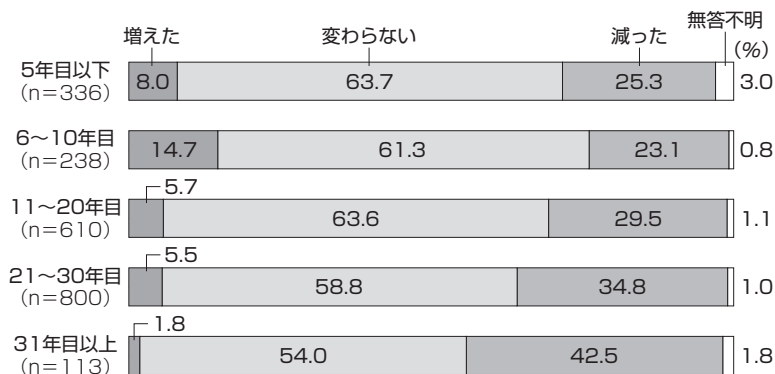


図11-2-5 学校に協力的な保護者(中学校教員/教職経験年数別)





ここで、「授業参観への出席率が高い」「PTAの役員を決めるのが難しい」の2項目を取り上げ、小学校の学年段階別での違いを確認したい(図11-2-8)。「授業参観への出席率が高い」は低学年では、9割弱だったが、高学年になると、

7割弱に減少した。一方「PTAの役員を決めるのが難しい」は低学年では4割だったが、高学年では5割に増加した。このような傾向は中学校になると、さらに進行し、図11-2-7での中学校の数値になっていくものと考えられる。

図11-2-6 学校にクレームを言う保護者(中学校教員/教職経験年数別)

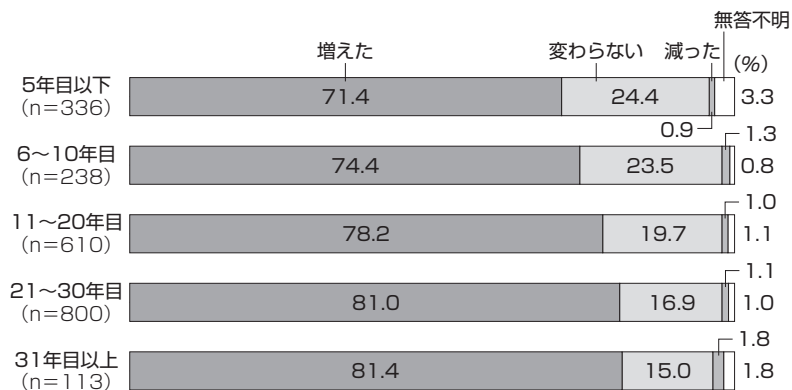
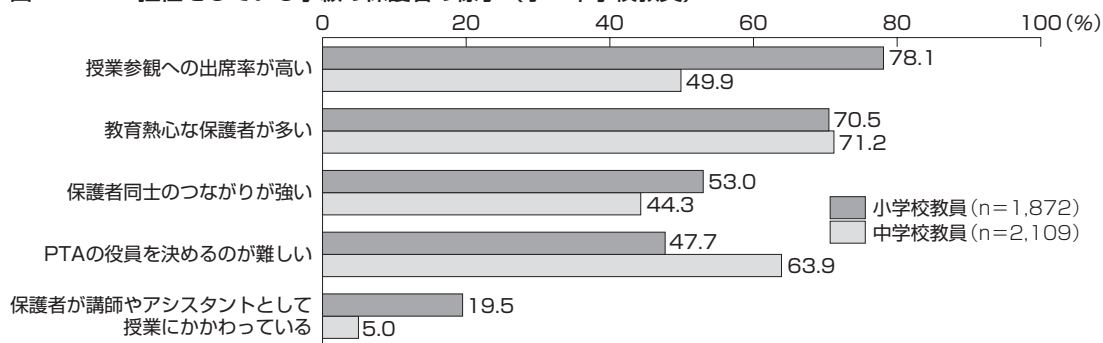


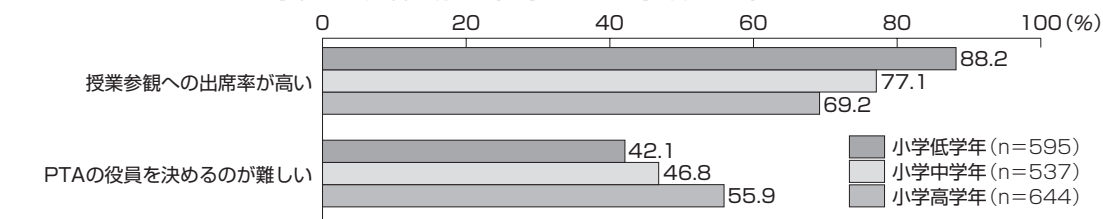
図11-2-7 担任をしている学級の保護者の様子(小・中学校教員)



注1) 数値は「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

注2) 中学校教員は、担任(副担任)をしていない場合には、もっとも多く授業を担当している学級について回答してもらっている。

図11-2-8 担任している学級の保護者の様子(小学校教員/学年段階別)



注1) 数値は「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

注2) 5項目のうち、2項目を抜粋。